

二〇二四年一月一五日

咳の吾に美容師そつと飴ひとつ  
万華鏡覗く心地や淵落葉

みきえ  
うつき

二〇二四年一月一四日

抱き癖は爺の子守よ日向ぼこ  
小春日に千手ひろげし御神木  
出棺の母を見送る柿花火  
水琴窟地底の秋を奏でけり  
御神酒の香湯気ごともらふ蒸饅頭

なつき  
澄子  
あられ  
うつき  
むべ

二〇二四年一月一三日

万里てふ茶室は古りて石路明かり  
縁小春指が覚えてゐる影絵  
お社に詣でて入る紅葉山  
小流れを縁取りて咲く石路の花  
吟行の小春日和と云ふ至福  
秋惜しむ移ろふ雲に癒やされて

うつき  
康子  
風民  
ぼんこ  
たか子  
やよい

二〇二四年一月一二日

秋晴れへ太郎の塔は手を広く  
メンバーを数へつ巡る園小春  
浅漬をポリポリと咬む乳歯かな  
団栗に頭寄せ合ふ吟行子  
村総出防災訓練冬はじめ

はく子  
せいじ  
康子  
あひる  
千鶴

二〇二四年一月二一日

太陽の塔は碧眼秋の空  
苔むせる岩の実生も照葉かな

あひる  
風民

二〇二四年一月一〇日

菊枕けふより後期高齢者  
七五三縦に横にとカメラマン  
天窓に射す日ゆたかに冬に入る  
神の留守退屈さうな巫女溜り  
朴の葉の落ちて明るき山の道

せいじ  
えいじ  
和繁  
なつき  
風民

二〇二四年一月九日

リースにと枯蔓を選ぶ山路かな  
あかぎれを覚悟の指や厨ごと  
読み聞かす絵本きりなし縁小春  
香り立つ造り酒屋の杉玉に

むべ  
康子  
康子  
智恵子

毎日句会みのる選・二〇二四年一月二七日